

## サンプル

『もう少し回復して、起きていられる時間が伸びたらもつとしっかりアナルで啜える練習をしような』  
それから二週間。おちんちんがない射精——乳首イキや切断面愛撫——をたくさん練習した。それから体力をつけるためにと折坂に散歩にも連れて行ってもらった。——散歩。ふかふかの芝生は慣れるまでちよつとちくちくして痛かったけれど、慣れればとても気持ち良かった。

「皐月、散歩に行こうか」  
「わん！」

今日も散歩に連れて行ってもらえる。折坂との外出も嬉しいし、セックス前の体力作りとしての散歩だと思つと尚嬉しかった。

なんたらかんたらというカタカナの長い名前（もう忘れてしまった）の下着を履かせて——実際には履くと言ふよりむしろタママタマのお片付けをして——もらい、緩い服も着せてもらう。玄関では仕方なく靴も履いて、約七十二時間ぶりの二足歩行。

「大丈夫か。ゆっくりでいい」

最近は週に二、三回のペースで散歩に連れて行ってもらう。とはいえ二足歩行は車までの往復でしかしていないので、気を張っていないと転びそうになってしまう。

「大丈夫です」

二足歩行のときは許される会話。本当はあまりしたくないのだけれど、人の耳はどこにあるか分からない。「わん」と答えることで折坂が変態扱いされるようなことは決してあつてはならないことなのでしぶしぶ人間らしく答える。

そんなことを考えていたからか、思ったより足が上がついていなかったらしい。つま先が地面にぶつかつて転びそうになった。

「っわ！！」

「っ！大丈夫か」

折坂はしっかりと抱き留めてくれた。転ばないか常に気にしながら歩いてくれるからこそできるのだ。嬉しい。

「ありがとうございます」

靴がなければこんなことにはならないのに。みんながゴミを捨てたりしなくなれば、僕たち犬はもつと生きやすくなる。

車を降り、暗い建物に入る。以前獣姦ショーを見たり、今着けている下着を買ってもらつたところ。実は建物の裏に広大な敷地を持っているらしく、予約をしておけばそこを使わせてもらえるのだ。もちろん誰にも顔を合わせることはない。

ホテルのような一室で服を脱がせてもらい、四つん這いになる。これで準備は万端だ。あとは外に出て、散歩。それから大好きなボール遊びとか。

「さあ行こうか」

夜だというのにそこはとても明るい。広めの公園。だけでもちろん外からは見えない。高い塀が隠しているのだ。

そこにはふかふかの芝生が一面に張られ、大きな木もある。ベンチもある。何も知らずに来れば普通の公園だ。水飲み場だつてある。子供が遊ぶ遊具はないのだけれど。

「さあ、少し歩こうか」

四足歩行に合わせ、折坂はいつもゆっくりと歩いてくれる。皐月は首輪ができないのでリードもない。けれどちゃんと隣を歩く。何かに驚いて逃げるようなこともしない。

「わんわん」

「皐月は本当にお散歩が好きだな」

「わん！」

外を全裸で歩けるなんて普通はできない。こういうところでもなければ一発で逮捕だ。それに、できるのは今だけ。あと少ししたら寒くなってしまう。期間限定のお散歩だし、内心ではちよつとだけデートとも思っている。

「わん」

「可愛いな」

折坂が満足そうに言うのを聞きながらせせと前足を出す。芝生のちくちくだつて慣れれば気持ちいい。そうだ、あとでごろりと転がろう。汚れたつていいのだ。服を脱いださっきの部屋にはお風呂だつてちゃんと用意されているのだから。

「さあ、少し休憩だ。喉が渴いただろう」

広いというほどの公園ではないけれど、一周を四足歩行で歩くとかかなり疲れる。それにずっと口呼吸なので喉も渴く。折坂がベンチに座り、その横で犬座り。

最初にぐるりと公園を一周するのは、折坂が自らの目で危険なものが落ちていないかを確認しているからだ、と気付いたのはここに来て二度目のときだった。ここに来るまでの衣服は嫌で仕方なかったけれど、外で自由に動き回れるのが嬉しくて、一度来ただけで臆月はすぐにここを気に入った。二度目ではまだ我慢したけれど、二度目のときには早くボール遊びがしたくて、一周するのを嫌がったのだ。早くボール遊びがしたい、と。けれど折坂はそれを許さなかった。一周だけでいいから一緒に回ろうと。それからご褒美のオレンジジュースが始まったのだ。初回と二度目はただの水だったから、きつとそういうことだと思つている。

「まだ待てだよ」

返事はしない。臆月の返事と「よし」が被つてしまつて聞き逃したら悲しいから。その代わりじつと折坂の目を見つめる。

「……よし、いいこだ。ちゃんと待てたな」

地面に置かれた水用の皿。そこに顔を突つ込み、舌を出して掬い上げるようにしてオレンジジュースを飲む。どちらかというど舐めるといふ感じだけれど、それでも以前に比べればぐつと上手くなった。

飲み食いをしているとき、折坂は余程のことがない限り話しかけてこないし身体にも触れて来ない。飲食に夢中だとしても驚いてしまうから、すぐく助かる。

「わん」

飲み終えて、皿の隅から隅まで舐めてきれいにしてから啜えて皿を返す。ご馳走様、と心を込めて。

「いいこだ。じゃあ今度はボール遊びをしようか」

「わん！」

地面を転がるボールだつて気にせず口に啜える。何か特殊な薬剤でもあるのか、ここは蚊もいないし、他の小さな虫もない。ここなら地面を転がるものを口にしても折坂は怒らない。だからきつと、安心安全の対策がされているのだろう。

「わん、わんっ！」

投げられたボールを必死に追いかける。家の中だとしても転がすだけなので距離がない。その点ここでは遠くまで投げてもらえるから取りがいがあるのだ。それに遠くまで取りに行けば折坂は普段より長く身体を撫でて褒めてくれる。

「いいこだ。上手だ。手足は痛くないな？」

「わん！」

大丈夫だから早く投げろ、と催促をして、ボールが投げられた瞬間から動き出せるように身体を準備する。これをするに「本当に犬だな」と折坂は笑う。でも楽しいのだからこうなるのは自然のことだ。野球選手だつてボールが投げられる前からバットを構えているだろう、と言いつ返そうと思つたときもあつたけれど、さすがにそれはちよつと違うかも、と後になつて気付いた。言わなくてよかった。

「さあ、そろそろ帰る時間だよ」

「わうっ」

(いや！)

もつと遊びたい。折坂が忙しいのは分かつているのだけれど、もつと遊びたいのだ。

「臆月……ほら、時間も遅いし疲れただろう。手首や膝も痛いんじゃないか」

そう言つて折坂は優しく前足首を回してくれる。確かに普段から四足歩行とはいえ、実際に歩いている時間はとても短い。水皿に飲みに行く、ペットシートに行く、そしてクッションに戻る。その程度しか動いていない。あとは、発情を伝える数メートル動くだけ。

「手首が固まつてる。痛いだろう」

「わんん」

痛くない。いや本当はちよつと痛いけど、もつと遊びたい。痛みより折坂と遊んでもらえる時間の方が好き。

こういうとき幸いなのは、首輪とリードがないことだろう。無理矢理引つ張られることがないのだ。だからこうして地面に伏せてしまえば折坂にはどうしようもない。

「臆月……今日はもうおしまいだよ。部屋に戻つて身体を洗おう」

返事はしない。折坂の方も見ない。ただ背中を向け、意思表示を続ける。

「皐月……」

やはり優しいな、と思う。折坂は決して怒って声を荒げるということをしない。皐月が怯えると分かっているからだ。でもその代わり、最近ではこうして「困った」という声を出す。息を吐く。そうされるとちよつと怖くなってしまうことをもしかしたら折坂は分かっているのかもしれない。

二度目の深い吐息が聞こえ、ゆつくりと身体の向きを変えた。ちらりと上を見る。折坂はやはり「困った」という顔をしていた。

「皐月、ほら、いいこだから。帰ろう」

「……」

でもやつぱり嫌だ。あとちよつとでいいから遊んで欲しい。だって帰ったら、折坂はまたきつと仕事だ。ここでお風呂も入ってしまってしまふから、皐月だけは寝る準備がほとんど整ってしまう。そうしたらかまってもえなくなってしまう。

「皐月……」

~~~~~

皐月は最近とても我儘になった、と思う。夜の散歩も遊びたいという気持ちを前面に押し出し、決して帰ろうとしない。長く遊ぶ、それは構わないのだが皐月はあくまでも人間の身体だ。四足で動き回れる構造にはなっていない。手首も固まるし、膝も痣になる。

皐月が奔放になりだしたのはやはり去勢手術を終えてからだ。きつと皐月自身、これで立派な犬になれたという自信が付いたのだろう。でもそれは折坂と同じだった。去勢までさせた。支配欲は言葉にならない程満たされたし、これで早々皐月は離れていったりしないだろうと安堵もした。

しかしこのままでもいいのか、とも思う。出会った頃の「好かれない」という気持ちでとにかくいいこ過ぎた皐月も可愛かったし、今の自由さは慣れてくれた証だと思う。けれど飼い主とペットという関係を考えてると、舐められているとも思えた。

（躰のし直しか……）

いや、本格的な躰はほとんどしてこなかった。皐月がとても従順ないいこだったからだ。長ければ数か月かかるだろうと思っていた。ペットシートへの排泄だつてすぐにできるようになったし、排便も恥ずかしくないながらもきちんとできた。水皿から飲むのはやはりこれも身体構造上難しいのはわかっていたけれど、それでも頑張って飲んでた。本当にとってもいいこなのだ。

やはり、このまま様子を見た方がいいのか。育った環境は少しだけだけれど聞いている。虐待を受けて来て、愛情を知らずに大人になったのだ。もしかしたら今初めて甘える時間を作れているのかもしれない。恋人としては何でも許し、甘やかしてやりたい。しかし飼い主としては許しがたい。

線引きはとても難しかった。

最近では仕事をしていてもそのことを考えてしまうようになった。躰をするなら早い方がいい。甘やかして続けてから厳しくしては皐月も傷つくだろうし、どうしたらいいか分からなくなってしまうはずだ。しかし、どう伝えたらいいものか。どうしても甘やかしてやりたいという気持ちが消えずにいた。

そうやって悩んでいると、時折皐月が不安げな瞳でこちらを見ていることに気が付いた。それですぐに分かった。我儘はきつとお試し行動だったのだ。

「皐月、おいで」

持っていたグラスをテーブルに置き、皐月を呼ぶ。分別のつく皐月はソファには許可なしでは決して上がらない。自分が犬だとしつかり自覚しているのだ。

「上においで」

そう言ってやれば素直に膝の上に対面で座る。そのときの嬉しそうな表情。きつと無意識なのだろうが、とても可愛い。

「皐月、可愛い。愛しているよ」

「わん」

すりすり頬を摺り寄せてくる。やはり不安と甘えが皐月の中でもない交ぜになっているのだろう。

愛情はしっかりと与えてきたつもりだったけれど、やはりセックスしないのが不安だったのかもしれない。セックスは確かに快感があるけれど、それ以前に大切な愛情表現なのだ。

（一度仕事を休んで旅行でも行くか。大丈夫そうならそこで抱こう）

~~~~~

折坂が電話を切った。戻ってくるかもしれないと急いでクッションに戻る。さっきと同じように丸まって目を閉じるとすぐに折坂が入室する気配があった。しまったブランケットを掛けるのを忘れた、と思っただけれど折坂は何事もなかったかのような足取りでデスクに戻った。

撫でてくれないのか、と少しだけ心が落ち込む。寝たフリをしているのだからきつと起こさないようにという心遣いだっただと思う。思うけれど、やはり少し寂しい。それにブランケットも落ちていないに掛けてくれなかった。——本当は、もう皐月なんていらぬのかもしれない。だって、言うことを聞かなかったから。悩みが解決したというのは皐月の改心を知ったからではなく、捨てる算段が立っただけなのかもしれない。

(……捨てられる……?)

嫌だ、大好きな折坂に捨てられるなんて。そんなの嫌だ。でも、きつとそうなる……。それなら自分から出て行った方がいい。野良になるのだ。捨てられて野良になるより、自ら迷子になったと思えばいい。迷子になりに行くのだ。

——捨て犬より、迷子犬の方がいい。

翌日夜——

夜中、尿意を催し目が覚めた。隣を見るが、折坂はいない。おやすみと言っていつもと同じく一緒にベッドに入ったけれど、こういうことは珍しくなかった。夜中にふと小説のネタを思いついたとか矛盾に気付いたとかで、眠って忘れてしまいう前にとベッドを抜け出しパソコンに向かうのだ。ここに来てすぐの頃、夜中に折坂を探し回って見つけたときに不安にさせたという謝罪と共に教えてもらった。

だからきつと今回もそんなものだろうと深く考えることなく寝室を出て、リビングに向かう。時間を問わず、皐月のトイレは常にここだ。夜中にしても、朝にはきれいにしてもらえる。万が一床を汚してしまふことがあれば申し訳ないけれど起こすこともある。

皐月のために作られたドアの隙間から入ろうとすると、リビングは明るかった。しかし折坂はいない。リビングで用をこなして、途中でトイレにでも行っているのか。それとも何かを取りに来て、消灯するのを忘れてそのまま仕事部屋に戻ってしまったのか。電気のオンオフは皐月のすべきことではない。廊下やリビングの床に近いところにはセンサーライトが用意されているので、皐月にとっては夜中のトイレもそれで十分なのだ。用を足し終えても折坂が戻らないようなら仕事部屋に顔を出そう。そうすれば折坂は何かあったのかと後をついてきてくれるから。リビングに導けば電気のつけ忘れに気付くだろう。

中に入り、ペットシートを指す。するとリビングの端に大きな段ボールが置かれているのが目についた。

それはかなり大きかった。皐月がすぼんと入ってしまったサイズ。急に不安になる。これは皐月を捨てるための段ボールかもしれない。いや、そうとしか考えられない。だって段ボールには何も書かれていないのだ。もしここに『ゆつたりクッション』とでも書かれていれば、皐月のクッションを新調してくれたのかな、なんて嬉しく思いもするのだが、これは無地なのだ。この大ききで無地なんて、わざわざ段ボールを買ったとしか考えられない。でもこんな大きき段ボール、普段使うことなんてないはずだ。引つ越しをするにしたつてもっと小さいサイズのものたくさん用意する。大きいものにたくさん詰めれば重くならない。やほり、皐月を入れるためだろう。もうそうとしか考えられなかった。

必死に何か他の理由を考えるけれど、結局一つも思いつかなかった。例え引つ越しに使うのだと思っても、皐月は何も聞いていない。引つ越しをするとしたらそれは折坂が単身行うものとしか考えられない。それはつまり、皐月を捨てることと同義だ。

恐怖心が募り身体が震えた。捨てられる。段ボールに入れられて、捨てられるのだ。それでも段ボールを用意してくれるのは優しいさなのかもしれない。だって段ボールに入れて捨てるなんて、皐月をきちんと犬として扱ってくれている証拠なのだから——そう思っても、少しも気分は晴れない。下手すれば朦朧としそうなほどの恐怖と不安で、その段ボールを見ながらの排泄なんてとてもじゃないができそうもなかった。目を逸らし、寝室に戻る。やはりそこにも折坂の姿はなかった。どこへ行ったのだろう。いや、きつと仕事部屋だ。仕事をしているのだ——きつと、温泉に行くために。そのために睡眠時間を削って仕事をしているのだ。誰かと——電話の相手と旅行に行くために。

涙が溢れた。自分は捨てられるのに、折坂は楽しく旅行に行くのだ。きつと皐月を捨ててから。そうすれば何も気にすることなく楽しめる。せいせいした、と思いつながら楽しむのだろう。もしかしたら皐月を捨てるお祝いとしての旅行なのかもしれない。

嫌な想像ばかりが膨らんでいく。怖い。怖い怖い怖い。捨てないで。眠気なんてもうなかった。涙が溢

れ、嗚咽が漏れる。叫び出してしまえば、そんな声を必死に抑えるべく、腹筋に力を入れたら、漏れてしまった。そうだ、おしっこをしたかったんだ。忘れていた。でも止めることはできなかった。床に水溜まりができていく。止めたいのに、術後に排泄を時間で管理され、出せと言われたときに、出していた身体は我慢も何も覚えていなかった。

~~~~~

不安でたまらなくて、身体は小刻みに震えていた。その身体を温かいシャワーが流していく。いつもだったら嬉しいシャワーの時間なのに、身体は温まっても心は冷たいままだった。

身体を拭かれ、入れられたのは空き部屋だった。部屋の中央には見慣れぬゲージ。すぐに分かった。ここに入れられる。

「入りなさい」

胸がツキンと痛んだ。そして心がなくなっていく。涙は落ちなかった。四つん這いになり、大型犬用のゲージに入る。中はやはり狭かった。身動きはほとんど取れない。身体の向きも変えられないので、出入り口にお尻を向けたまま伏せる。

身体を入れるだけでギリギリのゲージなのに、折坂は皐月の前足首に先ほどと同じようなベルトを巻いた。そしてそのベルトのフックをゲージの左右の角にそれぞれ留めてしまう。もう何もできない。もともと身動きできない狭さの中の更なる拘束だった。

捨てられるんじゃないのか。

ああ、そうか、本物じゃないから捨てることのできないのか。本物の犬じゃないから——。

「自由にさせすぎた」

（ごめんなさい……）

最近の皐月は本当に言うことを聞いていなかった。折坂が怒らないからと自由に過ぎた。

「俺がいないと生きていられないペットにしたつもりだったが、甘かったようだ」

違う、そんなことはない。皐月はもうずっと前から折坂がいないと生きていけなくなっていた。

だから『違う』と目で訴える。幸いそれはどうにか伝わったらしい。

「……違わないだろう。生きていけないのなら出て行こうとはしない。それとも外に出て、野良犬としてその辺で生活しようとも思ったのか」

（違う……いや、違わない……）

捨てられるくらいなら、と思っただけだ。自ら出て行けば、『今頃探してくれているかもしれない』という思いで、その浅はかな希望に縋って生きていける気がしたのだ。でも捨てられたら希望も何もなくなってしまう。捨てられたら、やはり自分は——自分は、親からも飼い主からも愛されなかったと現実を受け止めるしかなくなってしまう。その勇気がなかったのだ。多分そうなら、例え誰かが拾ってくれたにしてももう生きてはいけなかった。

でもそんな思いは自分勝手だ。捨てられたくないのなら最初から折坂の言うことをきちんと聞いておくべきだったのだ。でも我儘な態度を取り続けたのは皐月なのだ。だから自業自得だ。泣くなんて許されない。

そつと顔を伏せる。けれどそれすら折坂は許さなかった。

「顔を上げなさい」

目を閉じたまま顔を上げた。ツツと涙が零れ落ちたけれど、折坂は何も言わなかった。ガシャンと音がする。折坂の手が顔に触れた。きつとゲージは上が開くようになっていっているのだろう。そしてされた、目隠し。

「俺以外を見ることは許さない」

その目隠しは布製だった。そのことに安堵した。だってこれなら、泣いても目隠しが涙を吸収してくれる。声をあげず静かに泣くことなら許される、と。

幸いなのは口枷をされなかったことだろう。更に水分補給ができるようにとゲージに給水ボトルが取り付けられた。しかし何も見えない。折坂が皐月の頭を押すことで、その場所を教えた。

「先端に玉が付いている。これを舌で押せば隙間から水が出る」

試しに舌を出すと、そこに冷たい水がかかった。使い方は理解できた。場所も今の身体の形で覚えた。

「餌の時間になったら来る」

その言葉を残して、折坂の気配は消えた。

~~~~~

「臯月」

「っ」

突然の声に驚き身体が跳ねる。足音も聞こえなかったのだ。もちろん姿は何も見えない。

「……漏らしたのか」

(ごめんなさい)

「排泄は俺が許したときしかしてはいけないよ」

(ごめんなさい……でも我慢したことがないから我慢できない)

折坂はそれ以上何も言わなかった。叱ることもなく、叩くこともなく。ただゲージから臯月を出して、お風呂で洗ってくれた。久しぶりに伸ばせた手足。バキバキだった。でも大きく伸びをするなんてできなくて、転ばないようにとだけ意識した。

身体が清められると今度は湯に浸からされた。そしてその間、折坂は浴室から消えた。でも数分で戻り、身体を拭かれてまた檻の中に入れられる。もうそこに排泄物はなかった。きつとき片付けてくれたのだらう。そしてまた前足首をゲージにを繋かれ、目隠しをされた。つらかった。一度身体を伸ばしてしまつたから。一度明るさを見てしまつたから。終わりが見えないから。

(ペットショップの犬も、保健所の犬もこんな気持ちなのかな)

狭いよ、自由がほしいよ。可愛がつてほしいよ——。

でも、自業自得なのだ。何百回も心の中で繰り返した。

どれほど時間が経つたのだろう。目隠しのせいで感覚が分からない。

「もつと犬らしくなりなさい」

ゲージを開けられ、目隠しが外された。ゲージの外に出る。

「風呂に行く」

何も答えず、今度は四足歩行でついでに行く。先程は糞便にまみれていたから二足歩行だったのだ。身体はやはりバキバキだった。けれど必死について行く。室内なのだからそれほど距離はないはずなのに、やたらと遠く感じた。

四つん這いで浴室にいと、アナルを解された。まだ経験は一度しかない。以前エネマグラを入れられたときだ。それ以来放置されたそこはもう硬さを取り戻している。折坂は時間をかけて解した。

そして入れられたホース。腸内洗浄だった。そしてまた、折坂の支えるビニール袋に排泄を繰り返す。苦しいのと解放感の繰り返し。この頃にはもう何も思わなかった。抱いてほしいとも、思えなかった。

「これでいい」

ようやく終わりを告げられたときにはもう疲れ切っていた。久しぶりに動かし手足は痺れていたし、関節も痛いまま。そんな中での大量のお湯による洗浄。

解放された、と思ったときにアナルにめり込んだ異物。それはゆっくりと臯月の呼吸に合わせて挿入された。しっかりと解されたからか、それともそれ自体小さいものだったのか、全てを飲み込むのに時間はかからなかった。そして太ももに触れた柔らかいもの。振り返ると少しだけ見えた。しつぽだった。えっちな下着を買ったときにお願いで買ってもらった犬のしつぽ。

(懐かしい……優しくかったご主人様……違う、今のご主人様にさせたのは僕だ)

もう何度目か分からない「自業自得」という言葉を心の中で繰り返す。もうあの頃には戻れない。でもそれは全て自分が——。

しつぽを生やした状態でゲージに戻された。給水ボトルの水が替えられ、拘束や目隠しをして折坂は部屋を出て行く。また、一人の時間。でも今度は少しだけ違う。しつぽがある。お尻を揺らすとふわふわと感触のいいそれが足を撫でる。気持ちいい。少し気が紛れる。アナルにも異物感はあるけど痛みはない。

暗闇をじつと耐える。耐える以外に何もできないから。でもやはりどうしても過去の記憶が甦った。子供の頃の記憶。つらくて悲しくて痛いばかりの記憶。それでもふいに触れる柔らかいしつぽが臯月を慰めてくれた。

~~~~~

それから交尾は毎晩続いた。毎晩、と思ったのは目隠しを外された際に部屋に明かりが灯っていたから

だ。でもカーテンが閉め切られていたので本当のところはよく分からない。

そしてアナルの洗浄に慣れてくると自然に便が出ることはなくなっていた。それでも良かった。折坂が触れてくれることが大事だった。折坂に触れてもらえると、その思いだけで暗闇を耐えた。触れてもらるのはとても嬉しかった。けれどなぜか、食欲はどんどんなくなっていた。

そして何度目の交尾のときか。折坂はすでに数回射精していた。その間——いや、初めての交尾から、皐月は一度も達していなかった。ゲージに入れられる前はあんなにも毎日発情していたのに、交尾をしてもらえるようになった途端発情しなくなるなんて皮肉なものだ。けれど構わなかった。自分の快感より折坂の快感の方が大事だった。自分の身体で折坂が感じてくれる、という事実の方が。

「皐月……皐月っ」

何度も何度も揺さぶられ、体内を暴かれた。直腸を何度も擦られ、膀胱の裏を亀頭で突かれた。激しいピストンでも身体が崩れ落ちなかったのは折坂がしっかりと腰を抱き留め、そして身体を中心に剛直を突き入れられていたからに過ぎない。でもその手のぬくもりさえ嬉しくて、皐月はぎゅっとアナルを締め続けた。

「あ……」

思わず漏れた声。足に掛かった温かい液体。おしっこだった。失禁していた。

「失禁か……いやらしい姿を自分で見なさい」

皐月の身体を支える芯が抜けた。同時に腰を支える手も離れどさりと身体が崩れ落ちる。もう長いこと身動きできず、食事もともに食べていなかった皐月には体力が残されていなかったのだ。それでも何とか後ろを振り向き折坂を見るが、折坂は皐月を見ていなかった。けれどいつの間にも用意したのか、見たこともない全身鏡を運んでいた。

それは皐月の目の前に設置された。汚れ一つないきれいな鏡が皐月のみすばらしい身体を写す。以前より痩せ型だった身体は更に細くなり、骨が浮いていた。みすばらしい身体。こんな身体でも折坂が興奮してくれたことが嬉しかった。

そしてまた、律動が始まる。しかし今度はゆっくりだった。先程までの激しさはない。どうしたのだろう、と顔を上げると目の前の鏡越しに折坂と視線が交わった。

「しっかりと見なさい。皐月の飼い主は誰だ？他を見るのは許さない」

捨てられないのかもしれない、とこのとき初めて思った。折坂は皐月に躰直してくれているのかもしれない。皐月がずっと我儘放題だったから、飼い主が誰なのか、折坂が皐月にとつての何なのかを教えてくれている。

（よかった……）

捨てられない、と想像だけで喜びに涙が溢れた。前足は身体を支えているし、そして何より皐月はもつとしっかりとした従順な犬にならなければならぬので、涙を拭うこともできない。でも折坂はしっかりと見なさいと言った。だから目をぎゅっと瞑り、目に溜まった涙を無理矢理落とす。それでも次から次へと溢れてきて、それでも諦めずに鏡の中の折坂を見つめた。

「皐月……」

そして感じてもらうようにぎゅうぎゅうとアナルを締める。この頃にはもう、アナルの縁だけでなく直腸を締め付ける方法を覚えていた。腹を凹ませるようにして腹筋に力を入れるのだ。そうすると折坂は動くスピードを更に早めて、種付けをしてくれる。

身体を支える前足は痺れ、床にいたまま擦れる膝はとても痛い。けれど折坂が満足するまで皐月は懸命に耐え続けた。そして折坂が満足する頃、気を失った。

約4万8千文字です。

擦れ違いからの監禁、レイプ、ハピエンです！

従順ペットの発情生活はこれで完結です。

宜しくお願い致します。